

脳都物語 目飲

おおむらしんいち

1. 山の山

目の前に立つ山の山は、目飲の顔を見上げ眉を釣り上げ目を細めた。上下の唇を縫い合わせている太い脳吐糸が、漫画の笑い顔の歯のように見え、最初は笑っているのかと思った。それは狂人の笑いだった。山の山はこれが初場所だと教えられている。初めて縫ったからだろう、唇の上下に点々と残る縫い目にはかすかに赤い血が滲んでいる。うちの相撲では止血は完璧で土俵には血の一滴も落ちることはないのですよ。脳兎理事長の言葉を思い出したが、今にも滴り落ちそうな血の粒を見て、目飲は気がかりでならなかった。

山の山のその表情が威嚇だと気づくまでにはまだしばらくかかった。最初は子供が拗ねているようにしか見えなかった。顔や肩、背中、身体中から湯気が昇っていた。よく手入れされた白い肌はなめらかで触れれば手が滑って捕まえられないだろう。まともに組み合うことは難しそうだった。

山の山は十二歳になるまでは輪廻区の情動町で育ち、喧嘩に明け暮れていたが無敗を誇り、大人でも敵わないと噂されていた。確かに十二歳の誕生日には身長は二メートルを超え、もはや歯向かおうとする者は誰一人いなかった。四歳までは体が小さく色白であったため、近所の子供達からは本当は女なんだろうとからかわれていた。しかし、そのころにもすでに腕力があり、牛小屋を張り手一つで倒壊させたという噂もあるにもかかわらず、見た目のせいだろう、それほど怖れられてはいなかった。倒壊させたというのは牛小屋ではなく兎小屋だったのかもしれない。本当のところはわからない。

身体を大きくするために、プロテインを大量に含む脳吐塩を一日に一升舐めた。毎日一升の塩を舐め続けた。脳吐塩は、塩とは言ってもかなり甘い。子供達は親の目を盗んで公園の土俵に群がり、顔を砂にめりこませて夢中で舐め続ける。そんなに塩ばかり舐めていたら身体が溶けてなくなってしまうと親は皆脅すのだけれど、子供はまるで舌だけでできている生物であるようなように土の塩に頭をこすりつけ顎をめりこませ舐め続けるのだった。

山の山にとって脳吐塩は目覚しい効果をあげ、一年もしない間に身長は二倍になり、筋肉は見事に太くなり全身をうねった。身体が大きくなっても反射神経が衰えはしなかった。それは脳吐塩に含まれるナトリウムの効果である。

十三歳の時、すでに人生に倦んでいた山の山は、毛杵口親方に見出され力士になった。無敗の山の山に初めて土をつけたのが、毛杵口親方だったから、山の山は泣きながら親方に連れられていった。毛杵口親方の稽古は厳しく、毎日、数えきれない程投げ飛ばされ土俵の土を舐めた。土俵は何百年もの間脳吐塩を吸い続けていたのでとても甘く、山の山はわざと土俵に頭から突っ込んで、子供のように土俵を舐め回した。負け続けるということが、このように二重の意味で山の山を育てたのである。

山の山の目の前に横角が立っていた。なんだ、すこしも強そうじゃないなと思ったが、親方になんて言おうと顔を張られた。みくびってはいけない。勝ち名乗りを受けるまでは勝っていないのだと当たり前のことを言われた。

四股を踏む。大きく開いた足の先端が自分の支配する空間の境界を描く。大きく伸ばした両手の指先が、自分の支配する空間の境界を描く。四股を踏み自分の支配する空間を拡張する。より広い空間を支配すれば戦いは有利になる。

対戦者を見る。やはりそれほど勝利への欲望も感じられないし、かといって自らの勝利に自信があるようにも見えない。奇妙だった。こんな相手は見たことがなかった。

行事が「った」と叫ぶように宣言した。その瞬間、山の山は右の張り手をくりだした。

目飲に意識があったのは行事が何かを叫んだところまでだった。次の瞬間、こめかみから全身に衝撃を浴びてわけが分からなくなっていた。後で意識を取り戻した時には、土俵に上がるまでの事しか覚えていなかった。忘れてしまった記憶の中で、目飲は顔に衝撃を受けた後、一瞬で視野に行事の烏帽子が映り、それは空中から見た景色のように思えたが、観客席の派手な服をきた老女の大きく目を見開いた顔が醜いなと思ったことと、その後ろの席の握り飯を口に頬張った中年の男の額の痣はあと三年の後に剥がれ落ちるのだろうと思ったことだけをはっきりと思い出した。空中を回転しながら眺めているような気分だった。それと同時に、行事の軍配が自分に向けられたところも見ていた。行事の向こう側に、山の山が悔しそうな顔で土俵の土を一握り手に取り、口一杯に頬張るところも見えた。それは記憶ではなく夢の中のできごととしか思えなかった。

だが、失われた記憶は夢ではなかった。目飲が顔に張り手を受けた一瞬後、山の山は勢い余って身体を反転させ尻餅をついていた。山の山は、何か不正が行われたのに違いないと言い張った。あり得ない結末だった。誰にも勝敗は明らかだったので審議さえ行われなかった。山の山は顔を皺だらけにしてくやしがつたが、それでも土俵の土はいつものように甘く、そんな憤りもすぐに消えて行った。

控室に運ばれた目飲を診察した過無常時医師の診断では、奥歯は全部折れているが、命にかかわるような負傷はないという。男前になりましたよと脳免名免理事長は言った。温泉にでも入ればすぐに治るだろうと医師は処方した。折れた歯が温泉で治るものだろうかと思いたが、目飲がそう思っていることに気づいた過無医師は、折れた歯も温泉で治りますよと請け合った。脳免名免は笑いながらそれでは涅槃の湯にまいりましょと、嬉しそうに目飲を誘った。涅槃の湯は涅槃旅館にある。吐技場の力士門から力士専用のハイヤー十三台で繰り出した一行は引退した力士だという運転手がアクセルを一度ふかしたとたん涅槃旅館の前に到着していた。付き人は先に涅槃の湯に行かされたが、名免はお湯などいつでも入れますと言うと、目飲を大広間に誘った。大広間には昨夜と同じ脳吐相撲協会の面々が待ち受けていて、風呂桶のような酒樽を開け目飲に勧めた。百名は入る大広間のはずだが、大きな男達が揃っているからだろう民宿のことさら狭い茶の間のように感じた。

大広間の東の半分に飲み干され空になった風呂桶が積み上げられる頃、外が明るくなり神社に参拝する時間が来た。一向は十五台の力士専用ハイヤーに分乗して脳富神社に向かった。鳥居の前には既に東の横角虚蟹が数名の理事と一緒に待っていた。まだ夜は明けておらず、境内には闇が幾つも残っていたが、虚蟹の周囲だけは妙に明るかった。目飲が近づいても虚蟹は何も言わず目も合わせず、一旦並ぶとそれから揃って鳥居をくぐった。参道にしきつめられた砂利は二人の横角の体重を支えきれずピチピチと音をたて、次々と潰れていった。

紫の袴をはいた神主の先導で本殿の前まで案内され、そこで別の神主が祝詞をあげる。何を言っているのかは相変わらず分からなかった。やがて、おみくじの入った箱を目の前に捧げられ、虚

蟹がそこから一本引き、誰にも見えないように手で隠した。目飲も同じように引くと、神主の合図で同時にそれを全員の目に晒す。

神主は表情を変えなかったが、脳兎理事長以下役員全員の顔がそろってほころび、中には声を出さずに小さく万歳をするものもいた。理事になったばかりの串未器親方だ。おみくじは今日も両方とも大吉だった。

「では今日も場所は続きます」

脳兎理事長が改まった口調でそう言うと、全員が神殿に礼拝し、神社を後にした。

2. 北闘湾

目の前に立つ北闘湾は、目飲に興味などないかのようにそっぽを向いて四股を踏んだ。少し上下を違えて縫い付けた唇は、対戦相手をあざ笑うようだ。相手を挑発するために、あえて一つづつ縫い目を違える力士は多い。さすがに横角ともなるとそんな品のないことはしないが、どんな手を使っても一勝をあげたい輩はいるものだ。北闘湾は今年百十七歳、脳吐相撲の歴史の中で最も年長の相撲取りだと聞かされている。その年齢にもかかわらず毎場所勝ち越しを続けており、今も裂分の地位を維持している。どうやったらそんな年齢になるまで相撲を続けられるのかと誰かに聞かれた時、北闘湾は負けにとはんぶんどと答えた。昔の言葉であり、今では誰にも通じない。その歳なら大抵、魂の抜けたような顔つきになるものだが、北闘湾には魂がたっぷり残っていて闘い続ける限りそれを失うことはないということである。

老人特有のぎこちなくゆっくりした動作で、北闘湾は土俵に手を付き、行司の合図を待つ。

行事が「った」と叫ぶように宣言した。それから、どっこいしょと言いながら、北闘湾は前に倒れ込むように突進し、目飲の身体にぶつかって来た。額と額が激突すると、はじき返されることもなく、そのままお互いの額をくっつけあったまま腕を取り合う。北闘湾の動きが緩慢なので、目飲は相手の技を躲すことができた。ただ額が離れず、相手の動きは目の端で追うしかない。それは相手も同じことだ。相手が右の腕を突き出してくるとそれを左手ではじく。動きの止まったその右腕の手首を取ろうとすると、手首を返してこちらの腕を掴もうとしてくる。左の腕と右の腕が別の生き物のように動き、争いを続ける。それにしてもなぜ頭が離れないのだろう。そう考える余裕さえある。

捕らえた北闘湾の左手首は鍛えているとはいえ老人の腕であり、力を混めれば碎けそうだ。だが、抗う北闘湾は力を緩めることを許さない。思わず全力で握りしめ、動かないように内側に引きつける。その瞬間、北闘湾の腕がぐしゃりと音を立て、前腕部から力が抜けると同時に、手のひらがこちらをむいたまま肩のほうに曲がった。折れた。そう目飲は思った。

気づいた行司が即座に目飲に軍配をあげた。腕が折れたのでは勝負は決している。老人の腕を折ってしまった後味の悪さはあったが、自分の力で勝った初めての勝負だ。勝ち名乗りを受け、土俵から降りようとする目の前に北闘湾が立ちふさがっていた。なにごとかと思うと「頭がくったびげし」と応えた。なるほど、最初の激突でお互いの額がめりこんでしまったらしく、顔を離すことができない。しかも「頭がくったびげし」というのは北闘湾が口にした言葉ではなく、考えただけのことらしい。

どうしたものかと思ったとたん、腕が焼けるように熱くなった。なんだろうと腕を横目で見ると、上腕の真ん中あたりから骨が突き出していた。腕が折れたのはじいさんの方じゃなかったのか。そう声に出さずに叫んだが、北闘湾には筒抜けだったらしい。「お互いくらや」そう笑いながら応えた。

控え室に戻り、過無常時医師はつぶさに調べてから、頭蓋骨が細かく骨折していて、その複雑にはがれた骨の断面が互い違いに噛み合って、どの順番で剥がしてゆけばいいのかが難しいところだが、それさえ分かれば離すのは簡単だと言った。医師の腕は確かなようで、その言葉の通り三十分もかからずに北鬨湾の頭が外れた。額に丸く穴が空いて灰色の脳みそが見えていた。自分の額は見る気にもなれなかった。

それから過無医師は腕を調べて、上腕骨が二カ所で折れている。見なくても分かるほど骨が皮膚から突き出している、と診断した。医師は、即座に突き出た骨を指で腕の中に押し込んだ。痛みはさほど感じなかった。手首と肘を掴んでぐいと押すと、腕の形はもとにもどった。晒でしぼりあげてから、これでまあ大丈夫だろうと医師は言った。何が大丈夫なのか分からない。温泉を使えば二時間程で完治するよと、医師はこともなげに処方した。それを聞いたとたんに、目飲の腕に激痛が走った。

「温泉ですな」

脳兎理事長が嬉しそうに声を上げた。

「温泉だ」

「温泉ですぞ」

「温泉ぞど」

と他の理事達も声を合わせた。

それから涅槃の湯までハイヤー十五台で繰り出し、昨日の宿の隣にある「骨くらくら」という看板の旅館に入った。入り口から温泉まで細い廊下をずっと歩いた。果たしてたどりつけるものだろうかといぶかしむ程長い廊下だった。温泉に着く前に「カラオケ」の看板を見つけて騒ぎ始めたのは理事長だった。

「歌いたい。いや、歌わねば」

そう言われると誰も断ることができない。ぞろぞろとカラオケルームに入り、おのおのが曲番号を声高に叫んだ。

まずは、玉売左衛門の曲だった。

今日ポストには
二枚のハガキと
十二の封筒
そしてなんだか
不審なもの
収集車が来る
収集車が近づいてくる

ポストはいつから赤く塗られて
誰にでも触れられる場所にあるのだろう
監視カメラは一台もない
そういえば少女が
動物のシールを貼った
封筒を持っていた

今日のポストには
二枚のハガキと

十二の封筒
そしてなんだか
不審なもの
収集車が来る
収集車が近づいてくる

曲が終わると全員が涙ぐんでいた。
「ラブソングはいつ聞いてもいいなあ」
倉箸素麺がそう言った。どこがラブソングなのだと、目飲は心の中で思った。
「いや、やはり円歌だろうぜ」
そう言って歌い始めたのは、蛇虹等兵だった。襟帆岬の名曲「膨張灘」を熱唱する。

鱗町には恋人がいる
背緒町で待ち合わせ
あと五分あと五分
背緒町まであと五分

鱗町には恋人がいる
背緒町で待ち合わせ
あと四分あと四分
背緒町まであと四分

鱗町には恋人がいる
背緒町で待ち合わせ
あと三分あと三分
背緒町まであと三分

鱗町には恋人がいる
背緒町で待ち合わせ
あと二分あと二分
背緒町まであと二分

鱗町には恋人がいる
背緒町で待ち合わせ
あと一分あと一分
背緒町まであと一分

曲が終わると全員が涙ぐんでいた。
「円歌はいつ聞いてもいいなあ」
銅巻白子がそう言った。どこが円歌なのだと、目飲は心の中で思った。
「いや、やはり軍歌だろうぜ」
そう言って歌い始めたのは、味輪損堀だった。

はるか はるか 地平線
輝く 砲身 轟く 大砲
敵の姿は見えぬとて
なぎはらえ 撃ち倒せ
我らの祖国は永遠なり

はるか はるか 水平線
輝く 剣 切り裂く 大地
敵の軍靴は逃げるとて
追いはらえ 踏みつぶせ
我らの祖国は永遠なり

はるか はるか 未来へ
輝く 太陽 闇なき 世界
敵のまなこの尽きしのち
産み育て わが子らを
我らの祖国は永遠なり

曲が終わると全員が涙ぐんでいた。
「軍歌はいつ聞いてもいいなあ」
耳垢練紗がそう言った。どこが軍歌なのだと、目飲は心の中で思った。
「いや、やはりアニソンだろうぜ」
そう言って歌い始めたのは、首折剥離だった。

歌る 海洋 そなたへもどく
正義は 当分と 牛まわり 腰まわり
悪を けちら ちら
とどめは つきつきら
階上戦体 あぶりまん

踊う 手すり くりだす 秒る
正義は いずれ 糞まみれ 病まみれ
悪に どみれ する
おく たが けり けるら
階上戦体 あぶりまん

溜ます 海胸 ふかすると びどく
正義は 配達 竹みそに 土みくに
悪が めしましま
とびらは かなたには
階上戦体 あぶりまん

曲が終わると全員が涙ぐんでいた。

「アニソンはいつ聞いてもいいなあ」

雲皮米食がそう言った。どこがアニソンなのだと、目飲は心の中で思った。

「いや、ここは国歌だろうぜ」

そう言って歌い始めたのは、小柄な山田熟語だった。

海より来る者達のように
我々はどこへ向かうというのだろう
どれだけ高い波が襲いかかろうと
踏み出す足の下でそれはただの道になる
どれだけ深い渦が待ち受けようと
踏み出す足の下でそれはただの道になる
海より来る者達の足跡の底で
我々は何を待つというのだろう
どれだけ狡猾な言葉にあやつられようと
聞き尽くす耳の内でそれはただの反響になる
どれだけ虚ろな言葉に冒されようと
聞き尽くす耳の内でそれはただの音になる
海より来る者達の足音を聞いて
我々は何時まで眠っているのだろう

全員が、声を揃えて歌った。太く低い声が店の隅々まで染み渡った。理事長の声だけが疇高く響いた。最後まで歌うと、誰かが最初に戻って歌いはじめる。そうするとまた、全員が声を揃えて歌い続けた。吐く息に含まれる二酸化炭素がカラオケルームに充満し室温はゆっくりと上昇していった。

「倉多あ。ねるなあ」

理事長が大声で声をかけても、倉多理事はソファーに横たわったまま目を開けなかった。

「まだ二時だぞお。寝てはならあん」

理事長がどれだけ脅しをかけても、倉多の後を追って皺多、耳垢、首折、獐目木、山田と、理事達は次々と倒れていった。目飲の着た浴衣は全身がぐっしょりと濡れ、顔も頭もぐっしょりと濡れていたがそれは汗だった。歌えば歌う程室内は暑くなり、空気も薄くなっているようで、他の人間(といっても午前三時には理事長と目飲しか歌ってはいなかった)の歌う声が、ひどく遠くに聞こえた。目に入る汗のせいで、周囲の光景ははっきりと見えなかったし、声もよくは聞こえなかったが、最後に、理事長が何かを叫びながら倒れるところを眺めながら、目飲はなにかおかしいなと思った。

それからどれだけの時間が経ったのか、突然カラオケルームのドアが開くと、欠乏していた空気が部屋の中に突風となって吹き込み、室温は急激に低下した。空中に白い泡のようなものが浮かび、横たわる理事やソファーやテーブルの上に積もった。目の前で雪が結晶するところを見たのは初めてだった。視界がはっきりとし、音が戻って来るとともにすべてのものの距離が近づいてきた。理事達は次々と気がつき、身体を震わせて雪の下から起き上がって来た。そのとき、ドアを開けた係員がハイヤーの到着を告げた。

神社に向かうハイヤーを待たせることはできないので、結局、温泉には入らないまま、全員が脳富神社に向かった。鳥居の前で虚蟹横角と落合い、神殿で並んでおみくじを引いた。その日も両横角とも大吉をひき、大相撲は続いた。

3.減ヶ岳

目の前に立つ減ヶ岳は、他の力士も皆そうであるように、目飲になど興味がないという表情で土俵に立ってる。それよりも客席の方が気になるようで、同じ客席の方を繰り返しながらめていた。それも何かの策略かと思いながら、偶然のように視線をさまよわせ、偶然のように目飲がその視線の先を見ると、子供達が何かを囲み夢中になっていてあろうことか土俵に背を向けている。わざわざ土俵の間近に来ていながら取組みに背を向けているなど、目飲には信じられなかった。

減ヶ岳は五歳のとき、相撲と同時にマスターベーションを覚えた。きつく締められたまわしにこすられたペニスに痒みをおぼえ、股間を弄っていると快感に襲われてそのとたん手に生ぬるいものがついてた。病気かもしれないと思ったが、誰に言うこともなくそれがいく日か続くと、相撲の練習が終わりまわしを一人で外す時間が楽しみになっていた。誰かがまわしを外すのを手伝おうとすると、泣いて拒んだ。十歳になった頃には、まわしをしていない時にもマスターベーションができるようになっていて、一日に五回射精しなくては、落ち着かなかった。何回できるか試したときは、十二回目で気を失ってしまったが、たぶん、体調がよければあと十回はできるだろうと思った。

行事のつきよという掛け声とともに目飲は前に出て減ヶ岳の腹を手のひらで繰り返しつぱった。まわしに手をかけようとしても、減ヶ岳の全身を覆うやわらかい肉はまわしを完全に隠していて、誰の手も届かないだろう。横角でもまわしが取れないということを確認すると糸で縫われていない減ヶ岳の唇の端がくいと上がった。

十二歳の夏、左手で睾丸を揉んでいたら、夢中になりすぎて思わず睾丸を潰してしまった。しまったと思ったが、それはこれ以上マスターベーションを続けられなくなるかもしれないという怖れのせいだ。そのときは、二日ほどで睾丸は元に戻った。元に戻れば、睾丸がつぶれ、ひとく後悔したことなど忘れてまたマスターベーションを続けた。だが、それから一年たって気がついたのだが、左側の睾丸がいくぶんか縮んでいるようだった。少しずつ変化していたので気づかなかったのだろう。ただ、もっと早くに気づいていたとしても、マスターベーションをやめる事はなかったはずだ。

減ヶ岳が横角のまわりをぐるぐるとまわりはじめると、観客はどよめいた。それが減ヶ岳の攻撃なのか横角の攻撃なのかは誰にも判然としないかったが、何か戦いが行なわれていることだけは見て取れた。十回ほど回った後、減ヶ岳の目がおびえているのは土俵から離れている客にもわかったし、横角はすこしも動揺がないことは見て取れたから、これはもうすぐに決着がつくだろうと誰もが思った。

十四歳で相撲取りになった。睾丸は幾度も潰れ、両方とも体内に吸収されたのか触っても何も手応えがなくなっていた。それと同時に、体つきがふっくらとして、乳房も大きくなっていたが、相撲取りなので誰もそれをおかしいとは思わなかったようだった。眠る時間になると左手を握りしめ、親指だけを伸ばして、自分の肛門に突き立てる。そうすると、落ち着いてぐっすり眠れるのだという。次の日の朝、その親指を口に咥えて目覚めるとき、その親指は脳吐塩よりも甘く、しかも舌を突き刺すような刺激があって、目を閉じたまましばらくは自分の親指を吸い続ける。眠っている間、どんな夢を見ていたのかはすこしも思い出せない。

おそらく立会いがこんなに長引いたのは力士の力が拮抗していたからではなく、横角が立会いの最中に眠っていたからだろうと、勝負が決したあと減ヶ岳は悟った。土俵の中央に立つ横角はまだ目を閉じたまま眠っているようだ。

力士になった減ヶ岳は相変わらずマスターベーションを続けており、兄弟弟子もそれを知っていた。一日中、精液のにおいが身体から漂い、他の力士達は減ヶ岳と組み合おうという気持ちにならないようで、組んでもすぐに負けてしまう。勝ち星が増え、減ヶ岳は幕内力士に名を連ねるようになった。幕内ともなると減ヶ岳に簡単に負けるような力士はいないが、どうにも苦手だという者は多かった。そして横角との取り組みが決まった。

4. 没海凶

目の前に立つ没海凶は、力士であれば誰もがそうであるようにいつもどうすれば勝てるかを考えている。力士になって一年ほど考えた結果、脳吐相撲は土の上に倒れなければ勝ちなのだから、例え意識を失っていても、死んでいたとしても、直立していられれば勝ちなのだと考えるようになった。だから、決して倒れることのない身体、倒れることの不可能な身体でさえすれば、赤ん坊でも横角になれるだろう。その理論(没海凶は理論という言葉を知らなかったし、赤ん坊が横角になれるとも思ってはいなかったが)に基づいて、それから三年の間、肉体改造を続けた結果、みごとに理想の体型に到達した。土俵に立った没海凶は、今や誰の目にもその理想を具現していることは明らかで、数学的に完成された幾何学図形以外の何ものと見間違えることは不可能だった。勿論、没海凶の考えは誰も知らなかったのも、本当のところ、その理想が具現されていることは誰にも明らかではなかった。とはいえ、正三角錐となったその肉体は、背理法によって破壊する以外倒すことなど不可能だっただろう。

行事が促すと、没海凶は仕切り線の前まで進んだ。っぎょ。没海凶と横角がまさにぶつかり合うそのとき、誰かの不注意からだろう客席の一番後ろから強い風が吹き込んだ。軍配は横角目飲にあげられた。土俵に没海凶の姿はなかった。

5. 牛叩

目の前に立つ牛叩は、額を相手の額に押し付けるように近づけ、睨みつけた。行司は額が触れる直前にその間に軍配を差し入れて制した。観客席が湧いた。

牛叩は怒ったように眉を寄せ、塩を力一杯投げつけた。相手の力士には届かなかったが、土俵の外に飛び散った塩は観客の頭にも降り注いだ。観客は大喜びだが、親方たちは難しい顔をしている。

仕切り線に手をつき、行司がっばよと叫んだ瞬間、牛叩は自分が控え室の畳の上で寝ていることに気づいた。夢だったのだろうか。夢でないことは、脇腹と肩に熱い痛みを感じたので分かった。手で触れると指に自分の血がついた。血を見て怯えることはなかったが、どんな技を使えば力士の腹を切り裂くことができるのだろうかと思った。あのとときの対戦相手が誰で、立会いがどう展開したのか、どんな技が使われたのか、何一つ思い出せなかった。ただ、牛叩は相手の目だけを覚えていた。白い部分のないその目は大きく見開かれ、牛叩の顔を真っ直ぐ覗き込んでいた。

目をそらしたら負けると感じたので睨み返した。だがそのせいで反応が一瞬遅れ、相手の足砕きをかわし損ねた。

一瞬の後、牛叩は相手が自分のずっと上に立ち、その時はもうその黒い目は見えなくなっていることに気づいた。視野が闇の底に沈んでいくにつれ、牛叩は相手の目のことを忘れて行った。

土俵の上で腹を切り裂かれた力士のことは新聞で大きく取り上げられた。切り裂いたほうの力士については何の記事もなかった。そんな者はまるで存在していなかったかのようだった。

6. 岩塊

目の前に立つ岩塊は、決して土がつくことなどないと思えた。どことなく没海凶に似てはいたが、彼のような幾何学的な軽快さは感じられず、土俵に上がるだけで土俵の土が崩れてしまうその質量が、岩塊の強みだった。あまりにも重い身体を自分一人で土俵に上げることができなかったため、毎日、付き人十人が力を合わせて押し上げた。土俵が崩れ、それを修復するのに時間もかかり、毎日、取り組みは予定を大幅に遅れる。

岩塊は、あれはただの岩石ではないのかという、脳吐相撲愛好家からの投書は途絶えることがない。岩石島の海岸で半ば砂に埋れたところを発見され、相撲取りになった。だから、岩石だと言われても単純に否定はできなかった。

匿名の脳吐相撲愛好家の投書で、岩塊は最初から土がついているのではないかと指摘されたことがある。今、脳吐相撲協会では事の真偽を審議しており、事情に通じた者の話によれば、その審議も来場所までには決着がつき、岩塊は脳吐相撲界を追放されることになるだろうという話だった。

追放された岩塊が、その密告をした匿名の脳吐相撲愛好家に復讐するのではないかという心配もあり、審議はなかなか結論が出ない。来来場所にならないければ、追放はないかもしれない。

だが、元々、岩塊は他人の考えなど少しも気にならないようで、この事の推移には全く興味を示さない。今も、時生記部屋の土俵の横に、じっと座って地面を見つめている。

7.

彼は夜毎、女を若い女を連れて店にくる。毎日、違う女だ。バーテンがよくもてますねと話しかけると、醜い顔の力士というものは、かえって女に持てるものだと言ふ。女は彼の硬い腕にしがみつこうようにして店を出てゆく。その腕は彼が力を緩めれば海の水のようにやわらかくなる。

広い部屋には家具らしい家具はなく、石油ストーブに染み付いた灯油のにおいが、返って寒さを感じさせる。

部屋に入ると彼は連れてきた女を乱暴に床に投げだす。女は大抵驚いて文句をいうが、自分を見る彼の視線に気づくと怯えて何も言わなくなる。部屋に散らばった新聞紙や広告を皺くちやに丸めた屑やプラスチックの袋、それに喰いさしの魚やネギの切れ端が腐ったにおいを放っている。女にはそれだけで、その部屋がおかしいと気づく。突然、彼が大きな声で吠えたり、女に向かって突進して、目の前で止まると笑いだし、離れてゆく。部屋に入って五分もしないうちに、女は泣き出すか、ぼんやりとして何も反応しなくなる。

「ははああ。漏らしたな。しょんべんのおいがする。可愛い顔してこぼしたな。うあはは」
彼はうれしそうに、女のからだじゅうのおいを嗅ぐ。女にはもう避けようとする気力もない。

彼は硬直して膨れあがった性器を着物の裾から直立させ、女にのしかかる。
男根はナイフのように女の身体を突き刺し切り裂く。

8. 平坦重

目の前に立つ平坦重は絵に描いたような相撲取りだった。無表情で相手を見つめ、それに気づくと若い力士は冷や汗をかき、冷や汗は回しを湿らせ股間から小便のように足元に流れ落ちる。土俵を冷や汗で汚したことを恥とする若い力士が、何人も突端岬からテッポウ稽古のふりをして転落死する事故が続き、どうもそれは自死ではないかと騒がれることになり、今では平坦重の相手は十両以上の実力者に限られている。

実力のある力士たちは若い力士が平坦重の前に闘わずに敗れ去ることが不思議でならなかった。

「あんな絵一枚にどうして怖気づくのだ」
「どうして絵に描いた相撲取りに負けられるんだ」
「絵がどうして力士になれたんだ」

平坦重は絵だった。子供の描いたような、技巧も何もない絵でしかなかった。クレヨンで描かれた人物は輪郭も波打ち、それが不気味と言えれば不気味ではあったが、それだけのものだった。誰か子供が描いた力士の絵なのに違いないのだがあまりにも下手くそな絵であったため、モデルが誰なのかは見当もつかなかった。

平坦重より前に絵の力士は一人もいなかったが、百二年前の横角の一人が岩石だった。岩塊というその力士はあまりにも体重が重く、一人では土俵にあがることもできなかったのも、いつも五人の付き人に抱えられて土俵入りを果たした。その土俵入りを見るだけで、観客たちはいつ土俵が崩れるだろうかとハラハラし、仕切り線に両手を着く時には盛大な拍手が起きた。比類のない強さで、敵はないと言われたが、あまりにも強すぎたため誰も岩塊にぶつかってくるものがなくなった。自分からは動くことのできない岩塊は、それ以来白星に恵まれず、番付をどんどん落として行ったという。それに追い打ちをかけるように、心ない者から、岩塊は立っているというより、土俵に横たわっているだけではないか。それなら、最初から土がついているのではないかと指摘され、それに反論する者もいなかったのも、やがて角界から静かに身を引いて行った。もしも反論すれば、岩石は元々土なのだから、生まれつき土がついているのだと、笑いものになっていただろう。

平坦重は岩塊の話を聞いて以来、一度、岩塊に会って、話を聞いてみたいと思っていたが、無口だったので、その気持ちは誰にも分からなかった。

9. 顎錦

顎錦は目の前に立つことがなかった。土俵に上がってさえ来なかった。控部屋から土俵に続く脳砥道を歩いて来る姿は、大勢の観客が見ていた。大勢の観客が顎錦の身体に触れた、腕や背中から熱い湯気が立ち上がっていたという者もいた。しかし、顎錦は土俵に上がってはこなかった。用意されている水場の前で顎錦は倒れていた。一瞬前まで歩いていたのに、倒れた男の背中は鋭い刃物で滅多切りにされていた。傷口から血があふれ土俵の下に血だまりができていた。肩や背中への傷は深く骨が見えたという者もいた。筋肉の断面が白く光っていたという者もいた。全身の皮膚が剥がされ、まるで筋肉標本のような状態だったという者もいた。身体を仰向けにすると腹は十字に裂かれ、腸や胃がずりとはみ出して来た。身体が裏返されても首は上に向かなかった。首と身体はほんの少しの肉で繋がっていたのだが、身体を廻した力でその肉がちぎれてしまったようだった。体中から流れ出した血は通路をたどり控え部屋まで続いていた。だとするとあるいは顎錦はそこで切られていたのかもしれない。それでも、脳砥道を歩く姿には少しもおかしなところはなかったという。

大急ぎで鋼鉄の鉄板があつらえられ、まだ番付のない十二人の弟子がかけ声とともに顎錦の身体を乗せた。一人の呼出しが首を抱え上げて、身体を横に置き、封じ糸を唇から抜くと木綿の布で顔を隠した。それから弟子達は鉄板を担ぎ上げてどこかに運んで行った。残された血の跡の上には手早く脳吐塩が撒かれたので、すぐに血痕は消えてしまった。

土俵の上で不戦勝だと告げられると会場からは残念そうな声が漏れた。それも次の組み合わせが告知されると、新しい取組みの期待と熱気にすぐに塗り替えられてしまった。客達が帰る頃にはすべて忘れられている。これまでと同じように。

10.濁点丸

「あれは無敵ですな」

「あれは無敵です」

理事長も役員もみな口を揃えてそう言っていた。何か必殺の技を持っているのかと尋ねても、にやにやしながら誰も答えてはくれなかった。しかし、濁点丸が無敵なら、とっくに横角になっているはずだが、まだ横角ではないのだし、無敵ということはないだろうと思っていた。

土俵の前に立ったとき、あたりに濁点丸はいなかった。横角との取り組みでは、どの力士も先に土俵にあがっているものだから、濁点丸がいないというのは無礼な話だった。いぶかしがりながら、土俵に上がろうとすると、あるべき場所に土俵が見当たらないことに驚いた。土俵を取り巻くように何か壁が作られていて、とても上には行けそうにない。周囲を見回すと土俵はその円弧の途中で消滅していたので、なるほど土俵の上に何かがあるのだと気づいた。消滅した場所から大きな壁が遥か上空まで立っているようだ。見上げるとなるほどそれが濁点丸だとわかった。濁点丸が大きな力士だということは聞いていたが土俵よりも大きいとまでは聞いていなかった。これでは取り組みを始めようにも土俵に上がることさえできないだろう。するとこれは不戦勝と判定されるのですか。理事長に尋ねるとにたりと笑いながら、そんなことはないだろうと答えた。もしもこれが不戦勝になるのなら濁点丸は無敵であり、土俵に寝そべっているだけで横角になれてしまう。そんな横角が力士の中で最強であるなどという話になれば、脳吐相撲教会の権威はどこにもなくなってしまうだろう。理事長はそう続けたが、その言葉を信じてよいものかどうかはあやしかった。

